

## 京都文芸復興

二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった。

国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった。

遠く十三世紀末、ルネサンス期に湧き起った人間賛歌の思想は、人間の存在を万物の至上におく近代思想となり、やがて欲望の歯止めのきかない激流となって、ついには人類自らを生存の危機に追いやった。

しかし、今日ようやくにして、人間は自らの誤りに気づきはじめた。

果たして人間とは何か。

有史以来人間は、

喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望に翻弄される宿命を負いながら、

万物のひとつとして、その共生の中で、

生存してきたのではなかったか。

生きるとは何か、生命とは何か、それらを大きく育む宇宙とは何か。

哲学や宗教、文学や芸術表現が追求し続けてきた、この根源的な問題について、今や良心ある多くの人々が、生涯をかけた探求へと向かいはじめている。

我々はそのに、万物に対する謙虚さと天地自然への畏敬の念に満ちた、創造的精神の復興の兆しを見いだし、

現代を超克し未来を拓くに至る、たしかな可能性を確信する。

学生諸君、

この時代、この日本の姿を、  
きみたちの鋭く純粋な眼でじっと見つめてほしい。

そして

きみたちの先輩が重ねてきた青春の試みの数々と、  
何よりも

きみたちの美と真実を求めるいきいきとした心の姿が、  
芸術の国日本を再び蘇らせる運動、精神の尊厳を回復する戦いへと

この学園を立ち向かわせてくれることを願う。  
きみたちの存在と

きみたちの共感なくして、  
大学の未来はありえない。

大学の使命とは何か。改めて問い直したい。

大学は、一国の支柱たるべき次代を担う青春を養うことを使命としてきた。

しかしいまや、世代や人種、国境を超えて、  
心あるすべての人々と共に、  
真実を求め、理想を語り合い、希望を育む土壌となるべき、  
新たな大学像をこそ、構築しなければならない。

東洋の思想と叡智を基調とする、  
人間精神復興の壮大な実験と冒険に挑む勇氣と、  
芸術文化探求への絶えることなき研鑽が、  
人類を希望ある未来へと導くことを信じ、  
学問と宗教、芸術と文化の都、

この京都の地から発する文芸復興の鼓動が、  
日本の魂を静かに深く揺り動かすことを願って、  
ここに新たな出発を誓う。

京都造形芸術大学 理事長 徳山詳直  
一九九九年十月二十七日